

## ・Special interview 石倉洋子さん・・・・・・・・・・

慶應義塾大学院メディアデザイン研究科教授。専門はグローバル戦略、イノベーション。2000年からダボス会議に出席、モデレーターを務める。主著「世界級キャリアのつくり方」(東洋経済新報社)など。

### 原動力は好奇心

幼いころから「海の向こうには何があるのか？」と海外への好奇心が旺盛でした。大学時代に念願叶って留学したときには、とにかくもう嬉しくて興奮しましたね。しかしその当時は、まさか国際的な仕事をするとは思ってもみませんでした。

### 〈得意技〉の発見

フリーランスで通訳の仕事をする中でいろいろな人と出会ううち、自分の〈得意技〉は何なのかを考えるようになりました。授業や英語サークルの活動を通して鍛えた英語力が強みなのだと。〈得意技〉を見つけるためには、他流試合を増やすことが必要です。それも日本国内だけではなく、世界において。世界にはすごい人がたくさんいます。より高い目標・理想があります。彼らと競争し切磋琢磨していくことは、若者にとって、日本人にとって大切なことです。

〈競争〉ということばに対してネガティブなイメージを抱きがちな日本人。しかし、特に企業は国際市場において常に競争にさらされており、それなしにはやっていけないのが現状です。現代における〈競争〉というのは、単に価値同士の勝ち負けを決めるものではありません。どの点においてなら他の価値より優れているのか。つまり〈得意技〉を見つけるためのものなのです。

### 肩書にとらわれない人間性

〈得意技〉を見つけることは、自分とはどんな人間なのかを理解するためには不可欠です。自分も他人も含め、どういう人なのかということをも面的に理解していくことが必要です。特に国境がなくなり世界がひとつになっている今、国籍や経歴・所属などにとらわれず、生身の人間としてひとりひとりと向き合っていかなければなりません。だから、本当にすごくて尊敬できる人でも、その人の経歴を知らないということがよくありますね。「生身」という点についていえば、それは実際に会ってみる・やってみることでしか得られません。国と国、企業と企業の関係も、結局は人が基盤にあるわけですから、「国と国との関係も、人と人との関係から始まる」という信条は非常に意義のあることだと思います。

若者よ、外に出よう！

「海外に行くなんてまだ早い」と大人は言うし、「日本でもっと身を固めてから」と若者は言います。しかしそれでは遅い。海外に行くと、何となく明るくてわくわくするし、心が広がったように感じますよね。そういった感覚を早いうちから味わっておくのが大切だと思いますよ。

インタビュー・編集

宮田佳歩（2年PG局）